

本学の教育理念をめぐって —その意義を考える

龍 城 正 明

奨励者紹介〔たつき・まさあき〕

同志社大学文学部教授

同志社大学元副学長

〔研究テーマ〕選択体系機能言語学・音韻論・音声学

青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。

（コヘレトの言葉 12章1節a）

ただ今ご紹介に預かりました、文学部教授、元副学長の龍城です。

私も本年3月で70歳の定年退職を迎えます。これまでチャペル・アワーでは数回お話をしてきましたが、キリスト教文化センター事務長から最後のチャペル・アワーにお話をというご依頼を受け、本日を迎えました。

その際、難しいお話ではなく、同志社の後進にむけて易しく、為になるお話をということで、本日の奨励とさせていただきます。

同志社大学の建学の精神「良心教育」

同志社大学には大切に守るべき指針というのがありますが、その一つが建学の精神である「良心教育」であり、今一つは、「キリスト教主義、自由主義、国際主義」という三つの教育理念であります。

「良心」ということばについては、新島も早くからメンションしており、その最たるものは、今出川キャンパスの大学正門と京田辺キャンパスにもあります、「良心碑」であります。曰く、「良心の全身に充満したる丈夫の起り来らん事を」であります。これは新島没後50年、1940年に同志社校友会が、遺品庫とともに設立されました。

この「良心教育」はいつから言われるようになったかという、1888年「同志社通則」が制定され、その中に、「良心を手腕に運用して」というところが出てくるのです。当時、キリスト教に対して、学内外から激しい批判を受ける形で、「同志社通則」の綱領を変えて「同志社教育綱領」に切り変えていくのですが、キリスト教主義を全面に打ち出せなくなった時代に、この「良心教育」という表現が使われるようになりました。しかし、私は1968年に同志社大学に入学したのですが、当時は今ほどに良心教育ということばは聞かれませんでした。これが頻繁に用いられるようになったのは1970年代後半からではないかと言われています。

とは言え、「良心」という文言は、新島が著した「同志社大学設立の旨意」の中で散見され、1888年から絶えることなく受け継がれてきています。その抜粋は毎年入学式で一部朗読され、同志社にとって、まさ

しくこの「良心教育」が建学の精神といえるでしょう。最近ではこれをもとにした「良心学」なるものも盛んに議論されるようになってきました。

本学には、1986年に田辺移転がありましたが、2013年には文系学部の今出川キャンパスへの再移転が実施されました。その際、今出川キャンパスの再整備が実施され、新しく「良心館」が建設されました。この良心館という名称ですが、大学にもその他の法人内諸学校でもさまざまな建築物がありますが、2013年当時までにそのどこにも命名されていなかったのです。これは、新しく建設される建物に「良心」を冠した建物を建設するのは、少し戸惑いがあったのではと思われます。そこで、これはぜひ大学で使用するべきということで、当時の八田学長が部長会で提案され、それが決議され、良心館が誕生しました。その際、良心館の周りや良心館内部に適切な名称をと、当時副学長であった私に企画部からの依頼があり、それを受けて、私がいくつかの場所を命名しました。

その際、キーワードとして考慮したのが、「知、光、神聖、目的意識」でした。そこで、良心館の一階の東西100mに及ぶ長い廊下を Passage Sapientia「知の通路」、教務センター前の広場を Lucent Plaza「光の広場」、そして、彰栄館と同志社礼拝堂の間に新しく造営された広場を Sanctus Court「神聖なる広場」と命名しました。また、従来の西門から弘風館を通り、クラーク記念館まで続く200mの今出川キャンパスのメインロードも、新しくタイル張りで見えがえったのを機に、Purpose Road と名付けました。

それぞれが、先ほど述べましたキーターム、すなわち同志社にとって、最も相応しい概念を体現している名称にしたつもりです。特に Sanctus Court といえば、従来パーパスロードにあった大きなヒマラヤ杉を電飾していたのですが、この Sanctus Court の完成とともに、そこにあるヒマラヤ杉へとイルミネーションは移されました。今や、冬の風物詩として同志社のシンボルになっています。まさしく、神聖広場である Sanctus Court に電飾された立派なイルミネーション・ツリーが誕生することになったのです。

また、多くの同志社生が毎日行き来するパーパスロードのパーパスは、同志社 college song にその歌詞が見られます。このパーパスには「目的や意図」の他に「決意」という意味もあるのです。同志社EVE祭のメイン会場となり、ここで、いろいろな思い出作りがなされ、同志社生は日々ここを通ることで、将来の目的、決意を涵養する場所となっているのは言うまでもありません。先日も文学部の「父母会会報」で、副会長仲谷美智子氏が「『パーパスロード』そこを歩く学生の足取りも未来に向かって一直線に見えてきます」という表現を用いられており、このパーパスロードという名称も認知された感を強くしました。

三つの教育理念

さて、本題の三つの教育理念に移りましょう。

まず、この三つの理念が同志社で正式に教育理念として制定されたのはいつかということですが、これは2009年5月28日の総合企画会議で「同志社大学の建学の精神、教育理念、教育目標」が承認され、ここで完全にオーソライズされたということになります。

元はというと、2005年の「自己点検、評価報告書」作成時に議論され、2006年4月発行の「自己点検、評価報告書」に建学の精神である「良心教育」とともに、「キリスト教主義、自由主義、国際主義」という三つが明文化されました。これと前後して、2006年5月には「同志社大学教育倫理規準」が制定され、

ここでも、上記の建学の精神と教育理念が明記されています。このように、建学の精神である「良心教育」はかなり早くから知られていたのに対し、基本理念である三つは、案外最近、つまり、10年前に正式に制定されたことになるのです。

キリスト教主義

まず、最初のキリスト教主義ですが、新島は Christian College の設立を目指したのですが、同志社はミッション・スクールではありません。いうなれば、同志社は基督教の布教が目的でもなければ、当然ながら基督教信者を養成する場所でもありません。新島の目指すところは基督教を「徳育の基本」とするという点でありました。明治時代の前半に設立されたミッション・スクールは約70、そのうち約50が女学校であったといわれていますが、同志社はミッション・スクールではありませんでした。新島にとっても後で述べるように、ハーディー夫妻をはじめとするアメリカン・ボードから多額の寄付や資金提供を受けているので、ミッション・スクールとしての同志社を設立する方がずっと説得力があったと思われます。しかし、新島はあくまで、ミッション・スクールではなく、目指すのは「崇高で普遍的な価値観に基づく『教育』」であったのです。

新島は、アーモスト大学で学ぶことにより、教育が大切であることを認識し、特にリベラル・アーツ教育の大切さを知りました。したがって、新島にとっては、基督教というよりいかに教育するかが肝要であったのです。

勿論、欧米の文明が隆盛なる背後には基督教精神があると理解したので、新島自身は1870年アーモスト大学卒業後もアンドーヴァー神学校に通い、基督教という宗教について学び、深い理解があったのは、言うまでもありません。そこで、基督教を徳育の基本に据えた青年の教育が、日本の将来にとって必要であるとの信念に基づいて、1875年11月29日に同志社英学校を設立したのです。これが、基督教徒の養成ではなく、徳育の基礎に基督教の道徳をおくことで、品行を陶冶し、もって「地の塩、世の光」となる若者を育てること、これが同志社大学の基督教主義教育の目指すところなのです。

新島の所属していた会衆派 (congregational) は布教、特に外国伝道に関しては、他に先んじて1810年に組織を作るのですが、それがアメリカン・ボード (会衆派系外国伝道協会) です。ところが、日本伝道に関しては、会衆派が遅れをとり、長老派、改革派、監督派、バプテスト派が1859年、1860年に相次いで宣教師を横浜に派遣している状況でした。新島は1868年の夏、アメリカン・ボードのクラーク主事を訪ね、日本に宣教師を送って欲しいと訴えます。それを受けて、会衆派の宣教師、グリーン (Daniel Crosby Greene) が11月に日本に送られることになるのです。

このように基督教の日本での布教に熱心な新島を見て、アメリカン・ボードは新島がアーモストを卒業後、日本に帰国すれば、必ずや伝道の成果は上がる、と期待していたに違いありません。しかし、当時の日本では基督教に関しては未だ解禁されていなかったのです。

1874年の6月にアンドーヴァー神学校の卒業が予定されており、それより3カ月前にアメリカン・ボードのクラーク主事は新島をボストンに呼び、日本で宣教師として働く意志があるかどうか確認します。それでも新島は即座にやるつもりだと答え、5月には宣教師志願試問に合格し、アメリカン・ボードの日本国準宣教師 (Corresponding member of the Japanese Mission) に任命されます。これにより、日本

までの交通費、日本におけるその後の生活費、行動費もアメリカン・ボードによって保証されることになったのです。

しかし、その時すでに新島自身には直接福音を宣べ伝えることとは別の意志、別の使命感が培われ、それが、いつのまにか「てこでも動かないもの」に固まりつつあったと言われます。

当時、Edward C Boynton (ボイントン) が著した『新島素描』に見られる新島が書き記した文章として和田洋一『新島襄』143頁 (岩波現代文庫 2015年) による日本語訳では、次のように伝えていきます。

「合衆国の文明は、ゆるゆるとしかも絶え間なく発展しているが、実は一つの大きな根源、つまり教育というものから生まれ出ているということである。そして私は、教育と国民全体の発展とのあいだの密接な関係について思いを深めるようになった。そういうしだいで、私は、教育を自分の一生の仕事とし、その企てのために自分のからだを献げる決心をした」。

新島はここで、Christian College を設立するという夢を抱くことになりますが、250年も続いた切支丹禁制がようやく解けたばかりの日本では、ハーディー夫妻、クラーク主事もこの新島の計画を激励することはできず、誰もがこの夢の現実化は不可能であると思っていました。それを分かってかどうかは判断できませんが、新島は思いもよらぬ行動にでます。それが、あの有名なヴァーモント州、ラットランドのグレイス教会で開催された、アメリカン・ボード第65回年次大会での出来事です。

新島は Christian College 設立の旨意を会衆に訴え、カンパを募ろうとしました。しかし、自分たちの献金で宣教師を海外に送り、異教国の民衆を教化することこそに関心をもっていた会衆にとって、日本のキリスト教主義大学の設立など関心がないのは当然です。ハーディーもすぐには賛成しませんでした。しかし、新島の演説の結果、5000ドルものカンパが集まり、その中の一人の貧しい農夫が帰りの汽車賃に予定していた2ドルをそっと新島に渡したというあの有名なエピソードも誕生しました。しかし、当時のアーモスト大学設立のための資金目標は5万ドルだったので、新島が集めた5000ドルといえども、その10分の1にしかすぎなかったのです。幸いにもアーモスト大学設立予定日には予定額をわずかながら越えるだけの寄付金が集まります。しかし、この5万ドルをしても当初のアーモスト大学は学長の他、教授2名、学生47名という小さなスケールのものであったのです。

ここから分かることは、新島はアメリカン・ボードから直接、間接に多額の寄付金や給料をもらっていたという点です。さらに、後年にはアメリカン・ボードからは同志社宛に5万ドルもの寄付も受けており、現在の彰栄館もアメリカン・ボードの寄付によって建設されていたのです。

このように、新島はアメリカン・ボードから多大な援助を受け、日本へはキリスト教の布教を目的として、アメリカン・ボードの使命を受けて日本に帰国したにもかかわらず、ミッション・スクールの設立には潔しとしなかった。その理由とは、次の自由主義に大に関係するのです。

自由主義

二つめの自由主義に関しては、新島の有名なことばがあります。それは以下の言葉です。

「我が校の門をくぐりたるものは、政治家になるもよし、宗教家になるもよし、実業家になるもよし、教育家になるもよし、文学者になるもよし。且つ少々角あるも可、奇骨あるも可、ただかの優柔不断にして安逸を貪り、苟くも姑息の計を為すが如き軟骨漢には決してならぬこと、これ予の切に望み、偏に希うところである」(森中章光編著「片鱗集」『新島襄集』丁字屋書店 1950年 より奨励者漢字仮名遣い一部変更)。

さらに、同志社において重要なのは、倜儻不羈(はきはきしていて制御に服さず)なる書生を圧束せず、努めてその本性に従い、之を順導し、以て天下の人物を養成すべきこと。即ち、「自らが正しいと思うこと」がらについては、たとえ一人であっても強い信念に支えられて行動できる人間、つまり、自治自立の人間の育成にある」という点です。新島は、かといって、他者を省みない自己中心的な人物であってはならず、これは社会的に受け入れられることなど、望むべくもないという意味の警鐘を鳴らしています。

「自由」という語彙は、英語では liberty と freedom(free)という二語があります。ともに「(幽閉・束縛・従属・圧制的支配などからの)自由、解放、釈放、放免」という日本語訳があり、liberty を調べると(→freedom と同義語である)という説明があります。しかし、この二語は英語としての語源が異なるのです。Liberty はロマンス語系であり、freedom は元来の英語、ゲルマン語系の単語です。英語には二つの異なる経路から入った語彙が多く見られますが、それぞれには異なる語感があります。即ち、liberty は Statue of Liberty「自由の女神」や Give me liberty, or give me death!「われに自由を与えよ、しからずんば死を与えよ」(米国の愛国者 Patrick Henry の言葉)に見られるように、「圧力からの解放による自由」です。一方、free には「無料の」「負担のない」というまさしく「自由奔放な自由」という概念があります。最近では中国の南沙海への進出に抗議して、アメリカが南沙海を束縛されることなく自由に航行するという意味の Freedom of Navigation「航行の自由」というのがあり、自らその用法が異なります。要は同志社での「自由」は負担のない自由奔放な free ではなく、個々の責任のもとで許される自由、圧力からの自由、liberty なのです。また、「主義」とは英語では principle ですが、複合語となった場合は、-ism です。この場合、liberalism は可能ですが、*freeism, *freedomism という語彙は英語にはありません。このことから同志社の自由主義とは liberalism であるということがお分かりいただけるでしょう。新島の言う「自由」とは新島自身のとった行動に見られます。これは、和田によると、次のエピソードにより伝えられています。

一つは、「政府の奴隷になるのは嫌」という信念です。新島は1871年、日本から天皇によってアメリカに派遣された森有礼とボストンで会い、その森は新島の帰国実現に際して労をとることを提案します。その際、森は日本国のパスポート発行をはじめ、ハーディーへの新島に対する援助金の返済も含め、一定の金額を支払うことを提案しますが、新島はそれらを辞退しています。それは政府からの援助や公金で拘束されることを嫌ったからなのです。

今一つは、1884年4月6日に神戸港を出港し、再びヨーロッパへ外遊に出かけた際のエピソードです。5月17日には、イタリア半島の南端ブリンディシ港に到着、その時はローマをはじめとして7週間滞在してあちこち歩き回りました。その際、ローマでは法王との面接をもくろみます。しかし、そのためには定められ

た形式、つまり、法王の前で跪くという形式を守らねばならぬということを聞かされると、新島は「法王に対して私の膝はかたすぎるようです（“My knees will be too stiff for him”）」と言うことばで反応し、それは実現しませんでした。

新島の嫌いなもの、それは「貴族主義と官僚主義」であったといわれます。キリスト教徒であった新島は、ローマ法王に謁見することをも潔しとはしなかったのです。

以上のごとく、新島は誰に対しても自身の自由をつらぬきました。したがって、新島はアメリカン・ボードによって縛られることを極端に嫌ったのではないのでしょうか。新島にとっては、神は絶対のものであっても、キリスト教を布教するアメリカン・ボードもローマ法王も新島を束縛、圧政する以外の何者でもなかったのでしょう。したがって、同志社をミッション・スクールとはせず、あくまでもキリスト教主義の大学として設立したのだと思われます。ここでも新島の寄付やお金に縛られない、極めてドライで自身の責任のもてでの自由意志に基づいた決断が現れた結果であったのです。

我々が学生であった1960年代は大学には「宗教学」と言われる科目が必修でありました。しかし、これも今や必修ではなくなり、英文学科では1989年度から選択科目となっています。同志社大学では、キリスト教や宗教学に関心のない学生に無理やり科目登録させるのを良しとせず、本当に興味ある学生諸君に選択科目として受講してもらいたいという大学の配慮です。まさしく、束縛するのではなく、学生諸君の自由意志によって、科目登録を促しているという点がキリスト教主義と自由主義を体現していると言えるでしょう。

国際主義

三つめの国際主義ですが、これは新島が残したことばの中には「国際主義」という用語は見つかりません。

社会学部教授の沖田行司氏は、1907年第7代同志社社長、後の総長・原田助（たすく）のことばを引用して、当時の世界主義について述べています。原田は当時の「世界主義」「世界道德」という表現に鑑み、そうした情勢の変化に対応して積極的な国際交流を展開しました。彼は「今や世界の物質的文明の賜として地球の広さは日に月に減縮せられて居る。交通機関は益々開けて世界の市場も益々接近し来たり、倫敦紐育の物価は忽ちにして我国の市場に影響を及ぼしつつある」と。日露戦争後の世界は経済的にも密接な相互関係を築きあげ、「世界人類は同胞兄弟」というような状況が出現していると捉えていたと言います。

このように原田によって、国際主義という概念が同志社の中で涵養されていく結果となったのです。しかし、今や時代はグローバル。世界はグローバル経済、グローバル企業、グローバル人材と、「国際」ではなく、グローバル化の時代に入っています。

では、「国際」と「グローバル」とはどのように異なるのでしょうか。

「国際」とは英語では international、ここでの inter は「～の間の、相互に」という意味ですから、要は国の際（きわ）が設定され、国と国の関係という意味で、あくまでも「国」を基準とした概念なのです。言い換えれば、ここには国境という厳然とした概念があり、国としての存在感があります。一方「グローバル」とは、地球規模ということですから、そこには国境を越えた概念が存在していることになります。ここでは

個々の国という概念が前面にでることはありません。同志社では、2010年にグローバル・スタディーズ研究科を皮切りに、2011年にグローバル・コミュニケーション学部（GC）、2013年にはグローバル地域文化学部（GR）が設置され、私もGRの設置準備室長として、その設置にかかりました。その際、掲げたグローバル・トライアングル構想のもと、着実に同志社のグローバル化に向かって学生諸君は研鑽しています。

私の所属する文学部では、「人材養成目的」として、かつて「国際社会」という文言で表していたのはすべて「グローバル社会」に修正しました。また英文学科のディプロマポリシー、カリキュラムポリシーでも「グローバルな課題に」「グローバル社会に通用する実践的英語能力」に見られるように、「グローバル」という用語のもとに展開しています。また最近ではEC欧州諸共同体が個々の国のまとまりとして、通貨もユーロで統一し、相互の国々にはパスポートが不要になるなどグローバル世界実現の端緒として注目されました。

しかし昨今、UKのEU離脱、いわゆる Brexit が取りざたされ、これが進むと、さらなるEU離脱組がでてくるのではと懸念されています。またアメリカではトランプ大統領が America First のスローガンの下、明らかな保護主義を唱え、グローバル世界に反する動きを見せています。やはり、地球上では、文化、言語、宗教、それに経済的格差など種々の要因がある中で、よほど世界が一つになっていこうとする強い意志がなければこのグローバル化は難しいと言えるでしょう。

そこで、我々が考えねばならないのは、グローバルといってもそれぞれの国民性や文化、言語を大切にしていこう、という考え方。個々人が母語や母国愛、アイデンティティを大切にしていこうという点です。日本では、グローバル化と言えば、すぐに英語に堪能になること、言い換えれば語学力が最優先のように考えられがちですが、英語ができればグローバル社会に通用することにはならないという点を見直すべきです。それよりも日本人がもつ文化、母語としての日本語、即ち、日本人のアイデンティティをいかにアピールできるかという点が肝要なのです。グローバル社会の中で、さまざまな思考や文化をもつ人々と互角に渡り合うには、自分自身を大切にしなければなりません。これをおろそかにすると、それこそ大海の中で指針を失ってしまいます。

最近では日産の前CEOゴーン氏（Carlos Ghosn）の自らの報酬を過少に申告した疑いがあるとして、東京地検特捜部は11月19日、金融商品取引法違反（有価証券報告書の虚偽記載）容疑でゴーン氏を逮捕しました。確かに年間報酬が50億円とはとてつもない金額です。しかし、グローバル企業として、いわゆるグローバルスタンダードからすれば、グーグルのCEOサンダー・ピチャイ氏は210億、ディスカバリーCEOのディビット・ザスラス氏は165億円、そして6位のマイクロソフトのサティア・ナデラ氏さえ89億円と桁外れの報酬を受けとっており、それゆえ、ゴーン氏曰く、「自分は十分に50億円の報酬を受けとる権利がある」という主張につながるのです。このようにグローバルスタンダードから物事を見なければならぬという点は大切です。日本の基準からすれば、トヨタでさえ、CEOは3億程度の報酬なのですから。その意味では、日本は「グローバル、グローバル」と叫んでも、まだまだ、グローバルスタンダードにはほど遠いということでしょう。

しかしながら、ここで大切なのは、ゴーン被告が他国の弁護士を擁して弁護をしようとしても、また世界から彼への拘置のやり方に批判がでて、日本としては、自国の法律によって裁こうとしている点なので

す。これこそが、現在の、また将来の日本にとって最も大切にしなければならない点ではないでしょうか。

そこで、同志社がグローバル主義を唱えたとしても、日本の同志社、新島の設立したキリスト教主義、自由主義にあつてのグローバル主義であるとすれば、これは regional としての日本がいかに関グローバル社会にとけ込んでいくかを見据える必要があるでしょう。その意味で、単なるグローバルではなく、Regional=regio+bal という概念で regional が global にうまくとけ込むという概念が必要なのです。

同志社は来る2025年には150周年を迎えますが、新島が思い描いた大学の完成には200年かかると言っています。その200周年は、2075年。その時も建学の精神である「良心教育」と教育理念である「キリスト教主義、自由主義」の二つは変わることなく、同志社の理念として守られていることでしょう。しかし、いみじくも新島のことはにはない「国際主義」は、今述べたような世界の状況から大きく変化していることでしょう。同志社としては、もはや国際主義ではなく、グローバル主義、否、このグローバル主義もリージョナル主義に基づいて教育をおこなう時代になっていると思われます。

同志社大学は益々、日本私学の雄として、また世界に名だたる同志社として発展していくことを祈念し、本日の奨励とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

〔参考文献〕

同志社大学良心学研究センター 「同志社建学の精神―創立一五〇年とその先を見据えて」『良心を考えるために』（増補改訂版）2018年 180～181頁

2019年1月16日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録